

女子医大事件

体温・薬量の記録改ざん

指 瀨尾医師 脳障害隠す意図か

東京女子医科大病院で「香さん(当時12)が脳循環不全で死亡した事故」で、手術の責任者の医師「堀隠滅容疑で逮捕」が、瀨尾和宏容疑者(46)証「人工心肺記録の内容を臨

脳低体温療法 患者の体温を冷やし、脳の温度を低く(32〜34程度)に保ち、腫れを抑えることで、脳を損傷から守り、神経細胞へのダメージを減らす治療法。

床工学校士(3)に改ざんさせたのは、体温や薬の投与量だったことが30日

わかった。重慶の脳障害が起きたことを隠すため、実際には施した「脳低体温療法」をやっていないように装っていたとみられ、警視庁が経緯を調べている。

同日は30日、瀨尾医師の指示を受けてこの記録を改ざんした技士を証拠隠滅容疑で書類送検した。また、集中治療施設(ICU)記録の瞳孔の直径を改ざんしたとして、看護師長(2)も同容疑で書類送検した。

人工心肺記録を作るよう指示。人工心肺担当の医師佐藤 樹容疑者(38)業務上過失致死容疑で逮捕していたという。

牛込署捜査本部の調べでは、瀨尾医師は、明香さんが亡くなった3日後の昨年3月8日、臨床工学校士に対し、虚偽の数値に入れ替えて新たな人

するため、人工心肺から脳に送り込む血液の温度を32〜34度にし、体温を低く保った。ところが、人工心肺記録には、脳低体温療法をしている間の血液の温度や体温は平熱に近い「36度」台と記載された。また

手術チームはこの直後、脳障害に対処するため「脳低体温療法」を開始。明香さんの脳を保護

た脳の腫れを抑える薬の投与量も実際より少ない値になっていた。

瀨尾医師は逮捕前の朝日新聞の取材に「(手術中に)脳障害を起していたとは思ったが、快復する可能性がある」と思った」と話していた。

女子医大小児心臓手術事故
改竄
2002年7月1日 朝日新聞